大越町娯楽場と大正後期の今和次郎の活動について

—明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察・1—

THE AMUSEMENT HALL OF OGOE AND THE ACTIVITIES OF WAJIRO KON
DURING THE LATTER YEARS OF TAISHO-ERA—The relation of theatrical movement and architecture, from the end
of Meiji-era to early Showa-era Part 1—

米山 勇*, 川添 登**, 中川 武***

Isamu YONEYAMA, Noboru KAWAZOE and Takeshi NAKAGAWA

The amusement hall of Ogoe designed by Wajiro Kon is an important instance to suggest new rural amusement of theatergoing. The study of this amusement hall is significant to grasp the activities of Wajiro Kon during the latter years of Taisho-era. The time of the design of the amusement hall was in parallel with the beginnings of his Modernology. The theatrical eye closely related to prewar theatrical movement from Taisho-era to the early Showa-era, caused the chain reaction to architectural activities of prewar Waseda University, such as housing life research, theatrical history research, acoustic research and designs of auditoriums.

Keywords : *theatrical movement, stage, the amusement hall of Ogoe, Modernology,
Wajiro Kon, rural amusement*

演劇運動, 舞台, 大越町娯楽場, 考現学, 今和次郎, 農村娯楽

1. はじめに

建築家としての今和次郎の現存作品としては、山形県新庄市の積雪地方農村村研究所（旧農林省積雪地方農村経済研究所）が比較的知られている¹⁾。しかし、福島県田村郡大越町にある大越町娯楽場は、これまで全くといっていいほどとりあげられなかった建築であり、ほとんど知られていない²⁾。今回、この建築についての調査を行い、“**KON**”と表記された原設計図面や、今から施主の宗像利吉にあてた書簡の存在も明らかになった。

大越町娯楽場は、今が一貫して取り組んできた農村家屋改善との関連から興味深い遺構であるだけでなく、かつては本格的な劇場空間としての機能を包含していたものとして、今和次郎の諸活動と舞台の関わりを考える上でも重要な意味をもつ建築と思われる。また、既に別稿で論じたように、竹内芳太郎が今の民家調査のスケッチや野帖を集大成した『民家・見聞野帖』は大正13年から昭和9年までの間がまったく欠落しているが、その間も

民家調査は継続されていたから、おそらく資料が紛失したものと考えられる³⁾。大越町娯楽場の設計時期（大正10年～同15年）はこの期間と重複しており、この時期の今和次郎の活動内容を把握するための資料としても重要である。

本稿では、この建築に関する諸文献と調査を通して⁴⁾娯楽場建設の目的を明らかにするとともに、今のその後の活動とのつながりについて考察するものである。

2. 沿革と建築概要

1) 沿革

大越町娯楽場（図1、なお特別な場合以外、以下「娯楽場」とする）は、福島県田村郡大越町大字上大越町にある。大越村（当時）の経済事情が発達してきた大正15年1月4日に地鎮祭、同年1月6日に起工式、同年5月8日に開場式

本論文は、1994年度日本建築学会関東支部研究会で報告した内容を枠組みとする具体的な研究の一稿である。また、本論文の一部は1995年度日本建築学会大会で報告している。

* 東京都江戸東京博物館 専門研究員
早稲田大学理工学研究科非常勤講師・工修

** 郡山女子大学人間生活学科 教授

*** 早稲田大学理工学部建築学科 教授・工博

Technical Researcher, Urban History Research Center, Edo-Tokyo Museum, M. Eng.
Lecturer, Dept. of Architecture, Graduate School of Sci. & Eng., Waseda Univ.
Prof., Dept. of Human Life, Koriyama Women Univ.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Sci. & Eng., Waseda Univ., Dr. Eng.

が挙行された。総坪数は132坪、収容人員は1,350名で⁵⁾、総経費は土地の買収費も含めて一万七千円であった。運営にあたっては、当初は村営という話もあったが、結局匿名組合の形式がとられた。組合員は400人（昭和6年当時）で、村の有力者は大部分が網羅されていた⁶⁾。大正15年以来運営されてきた娯楽場は、昭和25年に町が建物を買収して町公民館として利用されたが、この時は昔の姿を留めており、昭和30年頃に改造されたと思われる。公民館の新設に伴い、昭和50年に公民館事務所を移転して、そのとき大越町武道館と名称を改めた。昭和45年に教育委員会が現武道館内に事務所を移転し、現在に至っている。

2) 建築の概要

本建築については「福島県田村郡大越村娯楽場畧設計図」と記された設計図面が残されており、「**KON**」と銘記されている（図2）。この図面の内容では、現状と異なる点がいくつかあり、今和次郎による原設計段階の図面であろう。さらに、後のものと思われる

注意事項
書き入レ

今

の記載があり、各所に今自身の注記が書き込まれている

図1：大越町娯楽場正面外観

図2：大越町娯楽場原設計図

（図3）。以下、この資料図面（以後「原設計図」）と現状とを比較しながら、建物の概要を述べる。

建物は木造平屋建・一部2階建、外観は両側に切妻屋根をもつシンメトリカルな構成であり、ファサードはほぼ竣工当時のまま残されている。原設計図では、切妻の母屋の両側に庇がとりつく簡素な構成であり、現状と大きく異なっている。外部仕上げは、正面部分の腰部を下見板張りとし、上部をモルタル吹き付けとしている。側面部分については、上部は原設計図に「下見ハ木皮（板）張」と注記されるように下見板張りであるが、腰部は戦災時の機銃掃射による損傷のため、現状では亜鉛鉄板張りとなっている。窓枠は、当初の木枠から⁷⁾、現在ではアルミサッシュに改変されている。小屋組は、棟上式の写真（図4）からも判るようにキングポストトラスである。屋根葺材については原設計図によれば「屋根材料ハ亜鉛鉄板或ハスレート」と記載されており、現状では赤い亜鉛鉄板となっている⁸⁾。内部については改変が少なくないが、板張りの大広間に列立する直径20cmの皮付き杉丸太による通し柱⁹⁾、それによって支えられる三方の二階棧敷席、優美な装飾が施された照明などが旧状を伝えている。

3. 施主の宗像利吉と娯楽場建設の目的について

施主にあたる当時の大越村の代表者、宗像利吉は、明治7年に福島県田村郡大越村の農家の長男として生まれた。家は貧しく、小学校卒業後14才で農業に従事する傍ら、農事研究に没頭した。明治35年の大凶作で窮乏に陥った農村の再建を試み、同37年に有志とともに「少壮大越縄綱会」を組織。これに発する労働組合の結成、さらに共済組合への発展に寄与した宗像は、農業経営の改善を通して、地方産業の振興と農村の生活向上に尽力し、大きな功績を残した。それは、科学的な栽培研究によって田村郡一帯を日本一の松川葉煙草の生産地に発展させたことや、自身の設立による「宗像農場」における一日8時間労働の実施、娯楽場の計画などである。また、煙草

図3：今和次郎による注記

耕作の指導者養成を目的とした福島県農家経営実践大学の創設等、大越町にとどまらず、煙草会に尽くした功績は大きかった。

娯楽場は当初、煙草や繭の共同集出荷場を主要な目的として計画されたが¹⁰⁾、昭和19年刊行の『大越村』には、宗像利吉による以下のような娯楽場設立の目的が引用されている。

「農村窮迫ノ打開更正ハ其ノ途幾多アリト雖モ、恒久性ナラザラベカラズ、其ノトシテ將來双肩ニ全責任ヲ擔フ澁刺タル青年處女ノ覺醒ト奮闘心ノ指導助長ニ待タザラベカラズ、然ルニ近來青年處女ノ農生活ヲ厭ヒ都會ニ集中セントスル傾向著シク從ツテ農村ハ有為ノ青年處女ニ乏しき現状ニアリ、之レガ原因少カラザルモ、農村ニ娯樂慰安ノ途ナク一年ヲ通ジ不規則ナル労働ト無趣味ナル生活ヲ嫌フコトノ如キハ、其ノ大ナルモノト思考セラル、此ニ於テ彼等ニ適當ナル娯樂慰安ノ道ヲ開キ、明朗横溢タル気分ヲ以テ規則的労働ヲナサシメ、計画ヲ踏ミ光明アル生活ニ從ハシムルハ最モ時宜ニ適シタルモノト認メ、茲ニ娯樂機關ノ建設ヲ企図シタル所以ナリ」¹¹⁾

ここに述べられているように、当時の大越村は娯楽がまったくない状況であり、特に若者にとっては、不規則な労働と無味乾燥な生活の中で、村の生活への嫌悪感が次第につり、都會へ行きたがる者が多くなっていた。こうした深刻な問題に対し、農業の担い手である青年の農村離れの防止や、婦人たちへの娯楽の提供は重要な課題であった。こうした状況を受け、共同集出荷場の機能をもちながら、休閑期には娯楽の場となることを目的に建設されたこの建物では、映画や浪花節、芝居を主に、村民の演芸大会や選挙の演説、あるいは各種農産物の品評会なども行われた。また、宗像が自分の農場において一日8時間労働を実施したり、不規則な農作業のために乱雑であった休日を全村的に統一し、月に2回あるいは3回と日を定め、芝居や講談などを催した¹²⁾ というように、積極的に村民に娯楽を提供する試みを行っていたことも注目に値しよう。

図4：繭共同販売所（大越町娯楽場）上棟式写真

4. 設計者選定の経緯

次に、娯楽場の設計者として今和次郎が選定された経緯について述べる。大正時代の日本の農業経営の改善を模索していた人物として、石黒忠篤¹³⁾の名は知られる。当時彼は、帝国農会¹⁴⁾を通じ、農業の「実家」である民間人を登用しての農業経営改善を計画していた。一方、煙草に関する県からの委託研究として、県の行政組織に出入りするようになっていた宗像利吉は、その適任者として他県から選ばれた3人とともに、帝国農会の経営改善調査委員としてしばしば東京へ出て諸問題の話し合いに参加するようになった¹⁵⁾。この頃から石黒との深い交流が始まった宗像は、大越村内の改善事業の最後に娯楽場を建てるという案をもって石黒のもとを訪ねた。それに対して石黒は、当時農政課の嘱託として農村建築物の研究を行っていた今和次郎（当時、早稲田大学教授）をその設計者として紹介したのである¹⁶⁾。

竹内芳太郎の『年輪の記』には、「村長が石黒さんの名刺をもって、大学の今先生の室を訪れることになった。先生は村長の方針を聞いて、すっかり感動をして承諾をされた。その翌日であったかと思うが、上野（伊三郎／筆者注）と私とが呼び出され、私が構想を練りあげてスケッチをかくから、二人で実施までの図面と仕様書、見積書などをつくって欲しいという話であった。『ある山村の娯楽場』こんなテーマを、幾度となく先生は口にせられ、なかなか意欲的であった」と書かれている¹⁷⁾。このように、娯楽場の設計を依頼された今は直ちに、当時大学生であった上野伊三郎と竹内芳太郎を呼び、自身のスケッチを基に実施までの図面と仕様書、見積書などをつくるよう依頼した。そして宗像への書簡¹⁸⁾（図5）に「貴村の風習等見学いたしたく二十二日の日曜か二十九日の日曜におうかゞひいたすお約束いたして置きましたが、二十二日は丁度差支出来止むを得ませんから二十九日の日曜の朝六時頃に着く汽車にてお伺ひいたしことにいたします」とあるように、幾度か現地を見学した上で構想を練り、宗像との手紙の交換などを通じて生じた変更などは、随時スケッチとして竹内らに提示したのであった。こうした山村の舞台空間の設計にあたっての、今や竹内らの意欲と構想の広がりとは、以下のような記述からも伺える。

「…ホールで盆踊りを踊る時には、この桟敷が見物席になるだろうというのが先生の構想であった。天井は張らず、やはり丸太で組んだ小屋組が、そのまま仰ぎ見られる。なるべく頑丈な部材を使い、代官様の家の土間に立ったような感じを出したいともいっておられた。しかしそれは、埃がおちるからとう村長の配慮から実現には至らず、結局竿縁天井になってしまったことは、私も残念でならなかった…中略…図面をかくようになってから、私は早速牛込原町の下宿から製図板をかつぎ込んで、そこをわれわれの製図室に当て、毎日授業後はそこに立寄り、夜おそくまで仕事

をし、時には徹夜をすることもあった。御飯は上野がつくり、その間に私は副食物の買い出しに出かけ、時にはすき焼で一杯というようなことにして、一夜を棒にあってしまっただこともあった。今先生も時々やって来られた。しかしそんな時は仕事よりも話の方に熱が入ってしまい、結果的には進行を阻害することになった。」¹⁹⁾

5. 舞台の復元

前述したように、娯楽場はかつて舞台を保有していた。また、客席についても升席や棧敷席をもち、舞台から客席へは花道が備えられ、本格的な劇場としての機能を呈していた²⁰⁾。ここでは、舞台を中心とした当時の娯楽場の姿を諸資料に基づいて復元考察する。

残されている「基礎工事設計書」²¹⁾（図6）、開場式の写真（図7）および聞書などの資料を現状と照合すると、正面両側には桁行9尺、梁間2間の「前面両袖」²²⁾（ファサード両側の切妻にあたる部分）があり、桁行4間の中央部とともに玄関と履物番小屋を形成していた。玄関から建物に入った客は左右の導入から、一段上の大広間に入る。大広間の入口側中央には、当初木造による映写コーナーがあったが、その後フィルムの延焼によってRCの映写室が設置された²³⁾。映写室の横には弁士が座る席が設けられ、燭台および書見台が置かれていた。便所は、前掲の「原設計図」では大広間の北側両端に配置されているが、「便所ハ臭気ノ恐レアリ、別棟ト致シベキニヤ如何」との注記の通り、別棟の「外便所」が取り付けられている。大広間南側には舞台が設けられ、観覧席と舞台を合わせた大広間全体²⁴⁾は奥行き（桁行）11間半、間口（梁間）8間の規模²⁵⁾であった。

舞台は広間奥に間口6間、奥行き3間半の広さで設けられていた²⁶⁾。広間西側には小階段を介して、舞台とほぼ同じ高さの棧敷席があった。それと相対する東側は棧敷ではなく平席であったが、芝居の際にはここに、取り外し可能な花道が置かれた。役者は、舞台からこの花道を通り、建物外の廊下を経て舞台後方の楽屋に入ったと

いう。

以上、娯楽場について舞台空間を中心に復元考察した結果を総合し、図8に示す。

6. 農家改善と舞台空間

前述したように、建物は当初、煙草と繭の集出荷を主要な機能として計画された。しかし、石黒忠篤が「今さんを派遣してやつたら、大変面白い設計が出来、宗像君の多年考えていた村落の娯楽場が出来、同時にちよつと板の間を片づけると繭市場になるという便利なものが出来た（傍点筆者）」²⁷⁾という言葉からも伺えるように、次第に「繭市場」としての目的は副次的なものとなり、舞台を包含する娯楽場の設立が主目的になっていった。今和次郎が宗像利吉へ宛てた6月14日付の書簡（図9）は、「図面（大畧の設計図面）出来ましたからお送り申します」とした上で、以下に抜粋するように舞台と客席を中心とした空間の具体的な構想を説明した興味深い内容をもっている²⁸⁾。

- 一、大広間は十二間に九間それに二間に六間の余分が付いておますから百二十坪となつて居りますから都合によつて長手の方を二間だけ減じても百坪にはなる計算です。
- 一、舞台は四間に五間といたして置きましたが、小さすぎますかどうか。芝居のかゝりのお方に伺います。
- 一、大広間の柱は多少ぢやまはなりますけれど、小屋組材の経済を考へてやつたのです。此の柱はどうしてもなくすることは出来ません。
- 一、大広間の床はなしに土間とすると余程安すくなくとも思いますが、どうしても床が必要でせうか。
- 一、便所は図面の位置にても外部より入る事としたらいくら臭気の点 防げると思いますが²⁹⁾
- 一、相談室と図書室を仮りにかいて置きました部屋は、大きさ及、使い方を一層お研究になつて知らせていただきたいと思ひます。仮りに、一つを腰掛け式にして、一つを畳式にするつもりに考へておます。

図5：今から宗像への書簡 (i)

図6：『基礎工事報告書』

図7：開場式写真

家娯楽の問題について今は少なからず言説を残しているが、「衣類の単純化について」で彼は、「娯楽の種類は、だいたいにおいて二分されている。衣食住のような、直接に物資を仲介としてでなければならぬものと、劇、映画、音楽のような直接物資消耗とは交渉なき種類のものとである。ゆえに非常時における娯楽の計画としては、物資と直接交渉の薄い第二の部類のものに重点を移す方針としなければなるまい」³²⁾と述べている。当時の「大越村」の状況は、まさに「農村窮迫」³³⁾という非常時そのものであり、そうした中で今が用意した農家改善の解答が、演劇や映画の舞台となる劇場の建設であったことは、重要な事柄である。

大越町娯楽場が建設された大正期は農村建築研究の胎動期であるが、今自身も白茅会での民家採集に始まり、石黒忠篤の依託を受けて全国の農村を視察して回っていた。そうした成果が包括的な形で提示された著書『日本の民家』の中で彼は、「農村住宅の改善という事は、しかし、充分工夫されなければならない事だ。家の間取について、構造について、屋敷全体の処理について。倉庫は村の共同でもよからう、社交娯楽のためには別に中心になる共同の建物を作ってよからう」と述べている。本書の出版³⁴⁾と時を同じくして設計された大越町娯楽場は、そこでの理念の共時的実践として捉えられよう。また、娯楽場の実務を担当した竹内芳太郎は、早くから農場建築と劇場建築とに強い関心を示していた³⁵⁾。佐藤功一、今和次郎に民家研究の指導を受けた彼は、柳田国男、石黒忠篤、大熊喜邦らと親交し、今らとともに全国の農村調査を行う一方、日本の劇場史、なかでも農村舞台を中心とした原始的舞台の研究に力を注いでいた。山村の舞台空間である大越町娯楽場の実施設計の経験が、竹内のその後の活動に強い示唆を与えたことは疑いないだろう。それは後に『日本劇場図史』³⁶⁾として習熟され、その46年後、83歳の年の『野の舞台』³⁷⁾として集大成されることになる³⁸⁾。

7. 結び—舞台から諸学へ

大越町娯楽場は、今和次郎の数少ない現存遺構であると同時に、おそらく彼が手がけた唯一、舞台を内包する建築である。この娯楽場は、地方の娯楽施設にありがちな、いわゆる「素人芝居」の交歓の場ではなく、「ちゃんとした舞台で他所から芸人を招んでやらせ、村の人達は全部見物側にまわつて、大いに一日をくつろぐという方法」³⁹⁾で運営された、純然たる芸能観賞のための劇場空間であった。

昭和6年刊行の『明い里暗い村』には、娯楽場について「優に二千人を容れるに足る劇場風の建築」⁴⁰⁾との記述があるが、このような花道や桟敷席を包含した本格

的な劇場空間の獲得は、当時の一地方の娯楽施設としては異例であったといえる。そしてそれは、宗像利吉、石黒忠篤の農村大越の生活改善への情熱、そして今和次郎の農家改善と舞台への注視の総合として結実したものであった。大越町娯楽場は、今和次郎が一貫して取り組んでいた農村家屋改善、東北地方の農村生活の向上を目指しての諸活動の中で、農村娯楽の問題に対し、今の造形理念の鍵のひとつであった「舞台」を通じた「観賞」行為の場として捉え、実際の建築空間として解答した事例として重要である。

また、娯楽場の設計時期は、考現学の開始時期とも重なっている⁴¹⁾。考現学が舞台装置と密接な関係をもっていたことは、「生活と室内と家具および服装とを総合的に、創作的に扱うのは舞台装置であり、昔のそれを総合的に見るのは風俗史家である」⁴²⁾、および「私たち同志の現代風俗あるいは現代世相研究にたいしてとりつづめる態度および方法、そしてその仕事全体を、私たちは『考現学』と称している」⁴³⁾（以上、傍点筆者）といった言説の総合から推量することができる。しかし、それら理論的体系としての考現学と「舞台」との連関性の問題を、本稿で論じたような農村改善の実践的探求の問題と同列に論じることは、不用意である。したがって、前者については稿を改めて詳しく論究することにしたい。いずれにしても、都市の近代における散策の多面的な分析を、演技—舞台装置の批評という視線⁴⁴⁾によって体系化した考現学と、今の現存する唯一の舞台空間である大越町娯楽場の設計とがパラレルに進行していたことは、注目すべき事柄といえよう。

舞台装置にかかわった今和次郎は、「建築は人生の舞台装置である」という考えのもとに、考現学からさらに住生活や民家の研究に新しい視点と方法を確立していく。さらにこうした視線は、明治末から昭和初期にかけての演劇運動と深く関連しながら、竹内芳太郎や須田敦夫らの劇場建築史研究、今と同じく芸術座の舞台装置を手がけていた佐藤武夫の音響学およびオーディトリウム設計、あるいはそこから派生する川島（池谷）定雄の振動学、さらに小堀鐸二の耐震構造論へと発展するなど、戦前の早稲田大学建築学科の理論的・実践的動向に連鎖的に展開していく。しかし、それら個々の問題についてはそれぞれ慎重に論究しなければならない事柄であり、今後、順次検討し明らかにする。

謝辞

本研究にあたり、宗像正氏、日本大学工学部教授・佐藤平先生、大越町教育委員会教育長村上京治氏、元大越町教育委員会教育長佐久間良雄氏、大越町教育委員芳賀忠氏、大越郵便局長宗像清吉氏、大清建設社長渡辺清治

氏、吉田浜蔵氏など多くの方々から貴重なご助言、ご協力をいただいた。また、資料収集と復元図面の作製にあたっては、早稲田大学大学院の岸未希亜、鈴木裕士両君の助力を得た。なお、本研究は（株）大林組寄附講座の一環として行われている。ここに記し、皆様への謝意を表します。

図版出典

- 図1：米山勇撮影
- 図2：大越町教育委員会蔵
- 図3：同上
- 図4：同上
- 図5：宗像正氏蔵
- 図6：大越町教育委員会蔵
- 図7：同上
- 図8：早稲田大学建築史研究室蔵
- 図9：宗像正氏蔵
- 図10：今和次郎著、竹内芳太郎編『今和次郎・民家見聞野帖』柏書房、昭和61年

註

- 1) たとえば、藤森照信氏が「積雪地方農村村研究所」について紹介しているが、「自邸を除き、今和次郎の建築作品で現存する唯一のものかもしれない」としている（藤森照信「デザイナーとしての今和次郎」『建築文化』1990年2月）。
- 2) 日本大学工学部・佐藤平教授によって福島県建設工業新聞の連載の中で（第2355号）紹介されている。また、後述するように、今の直弟子で本娯楽場の実務を担当した竹内芳太郎は著書の『年輪の記』の中で娯楽場の設計経緯等について語っている（「初めてもらった設計料」）。
- 3) 川添登、中川武、米山勇他：「今和次郎の考現学と銀座調査（その1）」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、平成6年9月、pp.1353～1354
- 4) 大越町娯楽場についての調査には表記の他に、御船達雄（早稲田大学大学院博士課程）、岸未希亜（同修士課程）、馬目マサミ（郡山女子短期大学4年）、八巻明美（同）が参加した。
- 5) 田子健吉編纂『大越村』宗像利吉発行、昭和19年、P.90
- 6) 『明い里暗い村』日本評論社、昭和6年、P.133
- 7) 大越町教育委員芳賀忠氏からの聞き取りによる。
- 8) 大清建設の渡辺清治氏によれば「木羽葺」との見解があり、2回にわたって葺き替えられた可能性もある。
- 9) 資料図面には「大丸太或ハ丸太数本タバネル」とある。
- 10) 前掲の資料写真（図4）には「藁共同販賣所上棟式」と記載されている。
- 11) 前掲『大越村』、pp.90～91
- 12) 前掲『明い里暗い村』、pp.132～137
- 13) (1884～1960)。明治41年東京帝国大学法科大学卒業、農商務省に入り、農務局農政課長、農林省農務・蚕糸各局長、農林次官等を経て昭和15年、第二次近衛内閣農林大臣に就任した。同21年に公職追放を受けるが、解除後同27年参議院議員に当選し、のち緑風会議員総会総長となる。
- 14) 系統農会の中央会であった全国農事会が明治40年に改称し、同43年の農会法改正で法制化されたもの。法制上は農政運動を禁じられていたため、表面上は農政研究会や中央農政倶楽部を通じて運動を行っていた。種々の農政活動だけでなく、系統下級農会に対する指導奨励、各種の講習・講話、農家経済調査など、各種の調査、印刷物の刊行なども行った。昭和18年、農家団体法によって消滅した。
- 15) 石黒忠篤：「宗像利吉君のこと」『農人宗像利吉翁』雄文社、昭和27年、pp.3～6、「…委員会というのはそういう大事な仕事をするのであるから、農業経営について本当に眼の明らかな人、實際家を選ばなければならないというので、先ず福島県の宗像君、それから群馬県の飯塚君、同じく清水君、山梨県の中込君の四人を、私が農務局に長くおつて、地方の人を沢山知っているのだから選んだ。そういう事情で帝国農会の経営改善調査委員の中に四人の實際家に加わってもらったのだが、宗像君と深くつき合い始めたのは、この時だったと思う。この委員会はしばしば開かれ、その度ごとに宗像君は福島県の大越村から出て来られ、いろいろな問題について忌憚のない話し合いをしたものである」
- 16) 前掲、石黒：「宗像利吉君のこと」。「…私がそういう施設のこととて宗像君を助けたのは、そういう村の施設がいろいろ出来て、最後に娯楽場を建てるというときであつた…中略…それなら農政課に嘱託として、農村建築物を研究してもらっている今和次郎という早稲田の建築科の助教授がいるから、この人に設計してもらえといつて、今さんを派遣してやつた」なお、ここでの「助教授」は「教授」の誤りであろう。
- 17) 竹内芳太郎：「初めてもらった設計料」『年輪の記』相模書房、昭和53年、pp.312～315
- 18) 基本設計段階でその全容を示して意見を求めるなど、手紙や葉書のやりとりがあった。現在、それらは利吉の孫にあたる宗像正氏が所蔵している。
- 19) 前掲、竹内：「初めてもらった設計料」
- 20) 大越町での聞き取り調査による。なお、実際の収容人員は前述したように1,350名であり、定員オーバーで床が抜けたこともあるとの伝聞もある。
- 21) 『基礎工事設計書』大越娯楽場建設事務所、大正14年11月。なお、竹内芳太郎によれば「…構造計算はもとよりのこと、仕様書や内訳明細書などは、すべて上野の手によって作成された」（前掲：「初めてもらった設計料」）とあることから、上野伊三郎によるものと思われる。
- 22) 前掲『基礎工事設計書』
- 23) 当該箇所上部（2階客席の下面）には、火災の痕跡が確認できる。
- 24) 『基礎工事設計書』には「観覧場及演舞場」とある。
- 25) 原設計図では、間口9件、奥行き12間の広間と間口5間、奥行き4間の舞台を計画した注記がある。
- 26) 前述したように、原設計図には「5間×4間」の注記がある。
- 27) 前掲、石黒：「宗像利吉君のこと」
- 28) 年代は記されていない。しかし、前掲（1月10日付）の書簡の差出人が「今和二郎」とあったのに対し、当該書簡では「今和次郎」とされていることや、前掲書簡の内容に「…設計万端を此の二十日までに成就いたす御約束申上いたし置き、その心組にて進捗いたさせ居り候処大隈侯の不幸にて、日時を失し、二十五日一ぱいまでに延引いたしたくたく御願申上度く」とあることから、設計図面の完成を伝える当該書簡は、前掲書簡よりも後の可能性が高い。また、内容から考えてここである「図面」は本論でとりあげている「原設計図」をさしていると思われる。
- 29) 前述したように、実施建物では別棟の「外便所」としている。なお、入り口上部には「両便所」の表札があるが、これは昭和17年頃には既に存在していたという（宗像清吉氏からの聞き取りによる）。
- 30) 今和次郎著、竹内芳太郎編『今和次郎・民家見聞野帖』柏書房、昭和61年、p.74
- 31) 前掲『大越村』
- 32) 今和次郎：「衣服の単純化について」『家庭科学』、昭和16年10月、（『服装史 今和次郎集 第7巻』所収、ドメス出版、昭和47年、pp.372～379）

- 33) 前掲、宗像利吉「設立の目的」
- 34) 今和次郎『日本の民家－田園生活者の住家－』鈴木書店、大正11年
- 35) 竹内芳太郎：「学友たち」前掲『年輪の記』， pp.101～119
- 36) 竹内芳太郎：日本劇場図史 第一・二冊，壬生書院，昭和10年
- 37) 竹内芳太郎：『野の舞台』ドメス出版，昭和56年
- 38) 竹内と劇場史研究については別稿で詳述する。
- 39) 前掲、石黒：「宗像利吉君のこと」
- 40) 前掲『明い里、暗い村』， p.133。なお、実際の収容人員は前述したように1,350名であり、定員オーバーで床が抜けたこともあるとの伝聞もある。
- 41) 考現学の開始については、工学院大学に所蔵されている「主旨および規約」に、「1. 記入セラレタル事項ハ会員ノ承諾ヲ得ベキモノトス／大正十一年十一月一日現在 今和次郎 吉田謙吉 岡田達弥 新井泉男」と記されている。なお、社会学者の佐藤健二もこの資料にふれており、「『大正十一年』の年号が正しいものかどうかについては慎重な検討を要する」としながら、
「考現学的な構想と実験が、震災前に出発していた可能性がまったくないわけではない」としている（佐藤健二：「考現学の考古学」『考現学探集』復刻版，学陽書房，昭和61年，pp.329～347）。
- 42) 今和次郎：「フランス17,8世紀のサロン」『住宅と庭園』住宅と庭園社，昭和10年11月号，（『服装研究 今和次郎集 第8巻』所収，ドメス出版，昭和47年，pp.391～393）
- 43) 今和次郎：「考現学とは何か」，今和次郎、吉田謙吉編著『モデルノロヂオ』春陽堂，昭和5年，pp.353～361
- 44) 前掲、佐藤健二：「考現学の考古学」。なお、佐藤は、「こうした演技論的な立論の傾向は、銀座での採集にかんするかぎり、今らの分類統計よりも、吉田謙吉の関心によりつよくあらわれている」と述べている。吉田謙吉（1897～1982）は築地小劇場（1924～1929）をはじめとする大正末以後の日本新劇の中心的舞台装置家であった。

（1995年2月10日原稿受理，1996年2月19日採用決定）